

2－6					
主題	適切な排便時間・量を促すための、下剤の内服時間・量の検討と変更について				
副題	集団管理から個別対応へ				
キーワード 1	個別対応	キーワード 2	排便	研究(実践)期間	14 ヶ月

法人名・事業所名	社福) 至誠学舎東京 吉祥寺ナーシングホーム
発表者(職種)	小泉里沙(介護職員)
共同研究(実践)者	他看護、介護職員

電 話	0422-20-0800	F A X	0422-20-0806
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	当法人は 2012 年で創設 100 周年を迎えました。これからも地域の方々とともに創る福祉を目指していきます。吉祥寺ナーシングホームは、平成 6 年 12 月より事業を開始している、入所定員 50 名、短期入所定員 3 名の特別養護老人ホームです。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

- ・当施設では、ご利用者全員に、3 日間排便が無ければ昼食時に頓服薬で下剤を内服していただいていた。しかし下剤を内服してから排便があるまでの時間は人それぞれである。
- ・夜間帯に下剤の反応がある方は、便意により睡眠を妨げられていると考えられる。また、便が漏れてしまうことによる着衣交換も発生しており、それにより覚醒してしまう方も多かった。
- ・睡眠中に下剤の反応があると、トイレに間に合わず、普段は失禁のない方でもパットやパンツに出てしまうことがあり、不快な思いをさせてしまっていた。また、失禁により落ち込むご利用者もあり、自尊心を傷つけてしまっていた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

【目的】

- ・ご利用者の下剤の量に対する便の量や下剤の反応する時間等を把握し、それぞれ適切な時間に適切な量排便があるように支援していく事を旨とする。

【仮説】

- ・日中トイレに座って排泄する方は、日中、トイレ内で排便できる。それにより夜間の便意や着衣交換で睡眠を妨げることを防ぐ。
- ・ご利用者全員が、同じ時間に下剤を服用するとルーティン化されている事をあたりまえと感じている職員の意識改革。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ・これまで曖昧で、記録上の表現は職員に任せていた便の量と形状を統一した。(2016 年 4 月から)
- ・日中トイレ誘導・夜間パット交換の方を中心にご利用者を 10 人ピックアップし

① 下剤の量・内服した時間

② 排便があった時間

③ 便の量・形状

を調べた。(2016年4・5月分)

・下剤を内服してから便が出るまでの時間を集計し、日中起きている時間帯に排便があるよう、内服時間を調整した。また、便の回数や形状から、下剤の量の再検討を行った。(2016年7月から)

・職員にアンケートを行い、ご利用者の下剤の調整を行ったことで、下剤や排便に対する意識がこれまでとどう変わったか調べた。

《4. 取り組みの結果》

・全体の着衣交換の回数は、取り組み前の1年間に比べて20%減少した。

・下剤の内服時間を変更したご利用者全員において、取り組み前に比べて夜間の排便回数が減少した。(最大52%、最少4%)

・下剤の量を決め、服薬介助をしている看護職員と、排泄介助をしている介護職員の連携が密になった。

・職員が下剤・排便についてより意識するようになった。(職員アンケートより)

《5. 考察、まとめ》

夜間の排便回数の減少は、ご利用者の安眠に、また着衣交換の回数の減少は、ご利用者と職員双方の負担軽減に繋がったと考えられる。

これまで排便を促すことのみを念頭に置いており、排便の時間や量が適切であるか等の配慮が欠けていたように感じる。今回の取り組みを通して、職員が排便に関して一層意識するようになり、初めにピックアップしたご利用者に限らず、ご利用者一人一人に適した下剤内服時間・量になるよう意見があがるようになった。

しかし、ご利用者全員について検討は出来ていない。また、ご利用者の状態は日々変化しているものであり、一度検討したからと言っていつまでもその検討結果が適切であるとは言えない。今後も検討と改善をし続けていく必要がある。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

排泄ケアナビ、http://www.carenavi.jp/jissen/ben_care/control/control07_2.html
(2017年6月6日閲覧)

《8. 提案と発信》

人生の中で何十年もやってきた排泄という行為が、病気や加齢等により難しくなってしまう。そして介護現場では、それをあたりまえのように感じ、現場のやり方に則って介護する。しかし、ご利用者一人一人に適切な排泄ケアは違うものである。

何事においても、個別ケアはとても重要なことである。今やっている介護をあたりまえと思わずに、一人一人に合ったケアをできるよう改善し続けていくことが大切である。